

追憶の記

林

是

幹

私は聖誕七百年の翌年、大正十一年四月に高等小学校一年を了へて祖山学院に入学した。祖父太田日定に伴はれ四月二日早朝甲府を立ち、鉄道馬車、鯉沢から舟で波木井に上り、本行坊に着いたのは夕刻であった。思出多き一ヶ年を坊から通学し、翌十二年三月在院生となり統学寮に入った。この年は御入山六五〇年の紀念の年に當った。松木先生は天台宗大学の留学を了へて、四月から母校の助教授として帰來された。二年生の私共は西谷名目を教へられたが私は第一期考査に満点を貰って大喜びした。簡要を得て居ると云う評を先輩から伝聞したが、丸暗記の偶然であつた。然し其後は万事に亘り先生から良い点は貰へなかつた様である。

二年修了後私は立正中学へ転校、昭和八年卒業、次いで一ヶ年の兵隊生活と云う具合で暫く山を離れて暮した。昭和十年四月から私も亦母校の教壇に立つことゝなつて再び先生と共に暮すことゝなつた。私は間もなく勤務だ復習だと云う短期軍隊生活に続いて、十三年九月の第一回応召を始めとして二回の召集を受け、前後六年半の従軍があつたため、廿一年七月復員する迄の思出は乏しい。此間学院も亦昭和十年四月から青年学校を併設し、軍事教練を実施することゝなり、更に昭和十六年四月高等部の専門学校昇格と共に配属將校の着任となつてから、兎角先生等幹部も軍事教育に伴ふ諸行事に出席される様になつた。時局とは云へ先生方も大変だつたと思ふ。

昭和二十一年十月から又学校に戻ったが、翌年先生は久遠寺教学部長に任ぜられ学校は一時退職の形となった。私も亦同部録事となって宝物館運営やら、山史資料の蒐集に従事する様になって先生との交渉も深くなった。又それ以前昭和十六年秋、在満部隊在任中に、樋口法兄の覚林房転住の後を承けて端場坊住職となって居たが、先生の生家の菩提寺と云う関係も生じた。昭和廿三年二月五日の命日を期して、御存知「和田屋のいしやん」の第十三回忌を先生や樋口師等と主唱し、有縁者の参会を得て執行した、食糧困難の当時の事故毎日山仕事に通って居た銀造老人にも麦のみのおかゆを喰べさせたものだった。本年六月六日に第五回の和親会の集いに登山された十五名の諸師と共に、いし女の卅三回忌、老人の第十三回忌の追善回向を執行したが、期せずして一同から先生の追憶が語られた。先生は生へ抜き祖山出身であり、地道な勉強をされた人でもあり、生涯を通じ種々教へられるところ大であった。恩師であり、先輩であり、古き身延を語り得る先生が亡くなられたことは寂しいことである。

(昭和四十三年六月十一日記) (図書館長)

松木先生を偲びて

福 島 義 孝

私が祖山学院へ就任したのは、昭和七年四月であった。新学年開校日の朝、塩田義遜先生と共に身延線で登山の途